OSAKA・Ⅱ ZONTA CLUB

大阪Ⅱゾンタクラブ第25号（2008年3月）

巻頭言

会長を楽しむ

新会長（2007～2009）　**久岡　眞佐代**

弁護士25年目、ゾンタ歴15年目、どちらも派手なことはできませんでしたが、小さなことをコツコツと頑張ってきました。そして、本年6月より大阪Ⅱゾンタクラブ第8代目の会長の順番が回ってきました。私は、自宅に私の実母（82歳）、隣家に夫の両親（81歳）が住んでおり、いつ介護が始まるか分からない状況ですので、その前に会長をお引き受けしました。

会長就任から7か月が経ち、当初は意気込みが空回りして慣れない事務手続に幾つかミスを犯し、そのつど地区役員の皆様、当クラブのメンバー、多数のゾンシャンに優しくサポートして頂き、改めて「ゾンタは温かい」と実感している毎日です。

先日、「ＤＶ被害女性が助けを求めている」との通報を受け、直ぐに女性と面談→警察の生活安全課にＤＶ保護申し入れ→裁判所に保護命令の申立をしました。ところが、女性が突然夫の許に戻りたいと言い出しました。理由を尋ねますと、それまで夫名義の持家で暮らしてきたので狭い借家では暮らせないと言うのです。私は、何と贅沢なことを言うのかと一瞬心の中で怒りました。しかし、自由に生きる権利と経済的に裕福に生きる権利のどちらを選択するかは女性自身が決めることであると思い直しました。

幸い、女性の夫がＤＶ被害女性のための、女性センター、警察、弁護士、裁判所がサポートするネットワークの存在に驚いて反省の態度を示しましたので、女性は夫の許に戻りました。それから2か月、女性からＳＯＳはなく、ひとまず安堵しているところです。

もし、女性に経済力があれば、間違いなく自由に生きる権利を選択したでしょう。しかし、結婚後専業主婦として生きてきた女性に今すぐ社会に出て仕事をしなさい、経済的に自立しなさいと言っても到底無理な話です。

ボランティアは、まず自分自身に温かい心がなければできません。弁護士の仕事も、ＤＶ被害女性を広く温かく思いやる心がなければ続けられません。その意味で私がゾンタで培った貴重な経験が本業に大いに役立っていると思います。

会長になってから、これまで以上に時の流れが速くなっていますが、この経験はきっとプラスになると前向きの気持ちで会長を楽しみたいと思っています。様々な場面で皆様のお力を借りながら頑張りたいと思っていますので、よろしくお願いします。

2007年9月13日例会　リーガロイヤルホテル「ベラコスタ」にて

26地区　第9回地区大会（2007年11月8日～10日　於神戸）

「ビジネスセッション」参加報告

久岡　眞佐代

日本だけで行う最初の地区大会、そして会長就任後最初の全体会議ということで、緊張の中にも楽しく充実した3日間でした。2泊3日の地区大会を終え、職場に戻ると机の上に郵便物と書類が山積みになっており、その整理に同じく3日を要しました。

しかし、地区役員、神戸ゾンタクラブの皆様は、私と比較にならないほどの時間と労力を費やし、日本のゾンシャンのために地区大会というボランティアを実践していただき、心より感謝申し上げます。

ビジネスセッションは、ロバート議事法に基づき公平且つ効率的に行われ、プログラムどおり9項目について議決され、大変スムーズで分かりやすい議事進行でした。当クラブでロバート議事法の勉強会を開いたことがありますが、会員22名の例会では実践する機会がなく、地区大会は大変有意義な勉強の場となりました。

26地区の長年の懸案事項であったエリア分割が4分割と決まり、別れることへの寂しさはありますが、2年毎に日本各地で開催される地区大会が日本のゾンシャンの大切な交流の場になると自分を納得させています。

ゾンタに限らず、世界組織のボランティア団体はいずれも会員減少に悩んでいると聞きます。過労社会とも言われる昨今、特に女性は、仕事と家庭（家事育児介護）の2つのバランスを取ることが難しく、そこに奉仕が加わるのですから、時間・資金・労力に余裕のある女性を見つけることは容易ではありません。勿論、会員増強を目指しつつ、現会員が仕事・家庭に支障が出ないよう、末永く奉仕活動に参加していただければ、「継続は力なり」という大きな実績が上がると確信しています。

国際ゾンタ副会長を囲んで

「開会式　基調講演」報告
車椅子からの出発
鈴木ひとみさんの講演を聞いて

西村　博子

車椅子生活23年の鈴木ひとみさん、壇上にあがられた彼女は美しい方でした。人は人生のなかで多くの喜び、楽しみ、そして悲しみや苦しみに出会う。調子の良い時もあれば辛い時もある。上り坂もあれば下り坂もある。その中でもまさかと突然の出来事に実際遭遇することがある。鈴木さんにとって最大のまさかが訪れたのは23年前の交通事故でした。

20歳で準ミスインターナショナルに選ばれ、その後モデルとして活躍のさなか、仕事先の甲府で事故にあわれた。頚椎を損傷され、長期の病院生活、それは想像を絶するほどの辛い日々、その中で彼女は最愛のパートナーに支えられて歩んでこられ、現在は多くの講演をされる中、女性にあう車椅子の開発やバリアフリーに関するお仕事、また射撃の大会でも活躍されています。このバリアフリーは耳慣れた言葉ですが、身障の方々の生活を豊かにすることが私たち皆の生活を豊かにするものにつながるという思想です。

私が今関わっている高校でのボランテイア活動に、最近大学院生の車椅子の仲間が加わりました。彼女と歩いて、その目線の高さを知り、建物や電車の乗り降りの不都合さを初めて知りました。段差や遠回りの道のりがとても気になりました。それでも力強くその仲間は車椅子で行きます。共生社会と言われて久しいですが、違いを認めて生きる大切さや人にやさしい町とは何かを学んでいます。

「世間の不幸を一心に背負って生きている障害者ほど悲しい事はない。身体が不自由でもいかに生きるべきか、元の生活でなくても残された身体で今までとは違ったことが出来るかもしれない。その身体に期待をして最大限の努力をして社会に貢献していこう。成長した生き方をしたい。いつもどうどうと積極的に生きていきたい」と述べられた言葉には重みと輝きがありました。

講演を聴くことができて感謝です。単行本購入しましたのでぜひどうぞ。

ワークショップAに参加して

清水　聖保

澤良世、元ユニセフ駐日事務所広報官より、「女性と女の子のトラフィッキング（人身取引）をなくすために」と題して、人身取引についてお話をお伺いした。

人身取引の定義は、搾取の目的で、暴力その他の形態の強制力による脅迫若しくはその行使、誘拐、詐欺、欺もう、権力の乱用若しくは脆弱な立場に乗ずること又は他のものを支配下に置くものの同意を得る目的で行われる金銭若しくは利益の授受の手段を用いて、人を獲得し、輸送し、引渡し、又は収受することをいう。

人身取引の犠牲者は、80%以上が女性で、70%以上が25歳未満である。そして、貧しく、教育を受ける機会に恵まれず、読み書きができない、もっとも脆弱な立場の人が中心である。少数民族の出身者や難民、出生登録がされていない子供、紛争下で暮らす人々など、社会的な保護の外におかれている人々が犠牲になりやすい。

人身取引の主な原因は貧困とジェンダーの格差と指摘されているが、女性や子どもを人身取引の被害にあいやすくする「プッシュ要因」として政情不安、社会の不安定、武装紛争、自然災害、差別、家族関係の崩壊などがあげられる。

人身取引をなくすための取り組みは、根本原因を根絶することが究極的には、必要である。それと同時に法整備や人権意識の向上も不可欠である。その他には、犠牲者をださないこと、加害者は処罰を免れないことを知らしめることも必要である。

日本の戦後と比較すると、初等教育が明治からできていたことや産業が発展していたこと、隣接国がない、植民地として支配された経験がない、女性の教育の充実化がなされていたことにより、人身取引は、日本では、わかりづらい現象となっている。

女性が、社会で働き、貢献する中で、人身取引の犠牲者のほとんどが女性であり、幼い子であることをもっと日本の私たちも知り、少しでも、この現状を人々に伝え、防ぐ手段のひとつにしていきたいと思えた。

世界の多くの国で、このようなことがまだまだ普通にまかり通っている時代では、もうないはずである。今まで知らなかったことを学ぶとともに、私にできること、また、考えていくことを地区大会では教わった気がした。

ゾンタストアに参加

宮本　典子

昨年7月の例会で、私達の支援しているベトナム、ベンチェの特別支援児学校の卒業生が、教材として刺繍した児玉房子さんの憲法九条のポスターを披露したところ、善く出来ているから今度の地区大会で50枚売ろう！ということになりました。

すでに地区大会のゾンタストアの申し込みは締切られていましたが、事務局の神戸ゾンタの方々の計らいで、名古屋さんの机を半分お借りできるとなったのはかなり遅くなってからでした。

一方、ベトナムでは一枚作るのに一ヵ月近くかかるため夏休も召集をかけたりして製作が始まりました。作家のアドバイスで色も統一され、腕もだんだん上がって、初期の作品よりもずっと綺麗に早くできるようになり、11月の初めには63枚を日本に持って帰ることができました。

大会当日は、会員が時間を都合して交代でストアを助けて頂き、結局25枚が売れました。会議が忙しく休憩時間に慌ただしく見に来られるかたが多く、ゆっくり説明することができなかったのが残念でした。

会場で売れたのは25枚でしたが家族や友人が次々に買ってくれてこの1月には刺繍した子供達全員（21人）にお年玉を持っていくことができました。子供達も日本で認められて、目標も出来とても喜んでいました。この5月には大阪で売ればどうかというお話もいただき追加注文もしています。

これはなによりも最初、ゾンタで売ろうとクラブで提案して頂いた御蔭です。皆様有り難うございました。またゾンタストアは皆が楽しみにしている場所であることもわかりました。これから積極的に参加するといいと思いました。

ベトナムの子供達

ゾンタストアにて

細見三英子氏
「中国の女文字を訪ねて」を拝聴して

坂本　千代

2007年の夏休みあけ9月の例会で細見三英子（ほそみみえこ）さんに卓話をしていただいきました。産經新聞記者をへてフリージャーナリストとして活躍中の細見さんはご著書『中国「女書」探訪』（新潮社）を出されたばかりであり、今回はそこでとりあげられた中国内陸部の小村の女性だけに受け継がれてきた文字のお話でした。

かつて世界に6000を越える言語があったと言われていますが、それらが今すさまじい勢いで消滅しています。それらを用いた共同体が戦争や環境破壊でその場で生きていけなくなって難民となったり、グローバルな情報社会に組み込まれ、合理的でないという理由で消滅した言語もあるのですが、女書（にょしょ）もそのような言語の一つです。漢族とヤオ族など少数民族が相対して住む江永県で、昔、富を生み出す技術として女紅（刺繍）が評価された地域に女性たちの共同体が生まれました。漢族の女は村のしきたりや字を教えることでヤオ族の女たちの尊敬と自らへの自信を満たし、ヤオ族の女は過酷な労働に耐える健康なからだと、雨の日は集会所で原始のエネルギーにあふれた斬新な女紅を披露することで、漢族の女の賞賛を勝ち得たのでしょう。ヤオ族の刺繍の模様に漢字が入り込み、村の女たちの暮らしと感情に添うだけの文字がいつしか作られていきました。プライドのある自立した女性たちのこのようなギブ・アンド・テイクによって女文字が成立したのではないかというのが、細見さんのご意見でした。

当日の卓話で細見さんはご著書を配布してくださっただけでなく、貴重な女文字の冊子や女紅の実物を持って来てくださいました。拝聴した会員からもたくさんの質問や意見が出て、非常に実り多くかつなごやかな1時間でした。

中村先生、真鍋洋子ＡＤとともに

中村順一氏
「国際社会における日本女性」を拝聴して

幡山　玲子

平成19年10月18日、国立京都国際会館館長中村順一氏をお迎えして、リーガロイヤルホテル皇家龍鳳において、大阪Ｉゾンタクラブとの合同例会が開催された。

中村氏は40年間外交官としてご活躍され、そのうち20年間を海外ですごされてきた。その間の多くの外国人と交流されてきたご経験を踏まえて、「国際社会における日本女性」と題して卓話していただいた。

平成20年は源氏物語千年紀に当たり、11月には京都で記念行事が行われる。11世紀においては、源氏物語の紫式部や枕草紙の清少納言など、物書きする女性が多く輩出するなど現代から見ても驚くほどの女性の活躍が見受けられる。その後女性は社会に出て活躍することが少なくなり、男性中心社会が続いてきた。最近まで女性が外国に出るなどは稀で、外国文化に直接触れることは少なく、多くは翻訳を通じて外国文化に接するか、一部の人を通して接するかしか機会がなかった。

他方欧米では、レディーファーストに象徴されるように、女性が大切にされ、夫婦で社交をするなど、女性も男性と一緒に積極的に社会に出て行動することが普通であり、また、アジアの女性の活躍も目覚しいものがある。

現在、日本女性も今までの女性の姿とは異なって、積極的に海外に出るようになってきている。青年海外協力隊では、女性隊員も多くなってきており、今後女性が活躍しうる可能性が多いように感じる。

日本女性の海外でのイメージは、ソフト、グレースフルなどで、その評価は高い。現代は西洋文明の反省期に当たり、欧米的価値観が唯一絶対ではなく、複数の価値の共存が求められている。その中にあって、日本の考え方、作法も国際的に求められている。

前難民高等弁務官であった緒方貞子氏は、ご主人が内助の功を発揮されるなど、いい意味日本的ではあるが、日本女性として国際的に大活躍された。儀典長として同行したアジア歴訪の際お見受けしたが、皇后様は細やかな気配りをされ、自然に堂々と胸を張って外国とつきあっておられる。これからは、語学力を磨き、国際儀礼を身に着けつつ日本伝統の和の作法も見に着けて、自然に外国の方と付き合いもてなしの出来る女性が多く出て、世界で活躍していただきたい。

在外勤務が長く、大使や儀典長を歴任されてこられた中村氏だからこそ、文明と文明の対立が際立つ現代にあって、国と国、人と人との付き合いにおけるコミュニケーションの大切さ、そこでのキーとなりうる和の伝統の重要性を痛感されておられるのだろう。

それにしても前提となる語学力は、――――。道は遠い。

萩原　謠子

10月14日（日曜日）堺市内にある老人ホーム「東光学園ふれ愛の家」を慰問いたしました。ここで私は時々デイサービスの方を対象に音楽療法を行っております。

参加メンバーは牛田会員、笠置会員、辻会員、西村会員、久岡会員、私です。

すでに2回ほど宮本会員のご自宅に集まり、銭太鼓とハーモニカの練習を積んでおりましたが、この日の朝10時にはゾンタクラブメンバー6名が集まり、私の教室でリハーサルを致しました。

1時に「ふれ愛の家」到着。準備万端整い、1時半より開演です。

近隣ホームの方も訪れ、30名近い人が集まってくださり、約1時間楽しい時間を共有致しました。

寄付はホームの車椅子のお年寄りに贈呈致しました。

銭太鼓、秋の童謡、指体操、ハンカチゲーム、合奏、コイン当てゲーム、じゃんけんゲーム、ハーモニカ演奏と趣向を凝らしました。

意欲的に参加してくださる方が多く、楽しんで頂けたと思います。

私たちも充足感を味わうことが出来ました。

宮本　典子

ベトナムの子らの瞳凛と撮したる大石芳野の瞳は凛凛と　　鶴見和子
（大石芳野さんの土門拳賞受賞を祝って）

大石さんと大阪Ⅱゾンタクラブとのおつきあいは、クラブ発足当時に遡ります。'94年3月10日チャーターナイトを終えた私たちが、その年11月、第1回のチャリティイベントにお迎えしたのが大石芳野さんでした。その年3月に芸術選奨「文部大臣新人賞」を受賞されたばかりの大石さんは、とても初々しく、一方ゾンタのひよっこだった私たちと、同年代で、専門職ということもあってとても親しくお話できたことを覚えています。しかしその御講演は鋭い感性で人々の内面に迫るもので、真実は顔の表情にあらわれるというとても素晴らしいものでした。

翌年1月あの阪神淡路大震災の時には会員の家に泊って取材されたと伺っていましたが、その後は、しばらくクラブとしてのおつきあいはありませんでした。しかし、クラブの奉仕事業、資金面も整ってき、国際的な奉仕先として女性の教育とくに奨学金をあげる先を探そうということになり、大石さんに御相談し、紹介して頂いたのがベトナムへのフジ基金です。FUJI奨学基金（現在FUJI教育基金）へは2001年度から支援を始めています。

フジ教育基金代表ト・ブー・ルーンさん、大石芳野さんと

大石さんはこの13年の間に多くの個展の写真とその短いタイトルによってお仕事を発表されました。また『カンボジア苦界転生』講談社、1993。'94年日本ジャーナリスト会議奨励賞『HIROSHIMA半世紀の肖像』角川書店、1995。『沖縄　若夏の記憶』岩波書店、1997。『活気あふれて、長い戦争のあと』草土文化、1997。『生命の木　アジアの人々と自然』草土文化、1998。『ベトナム凛と』講談社、2000。2001年土門拳賞、『コソボ　破壊の果てに』講談社、2002。『アフガニスタン　戦渦を生き抜く』藤原書店、2003。『コソボ　絶望の淵から明日へ』岩波書店、2004。『子ども　戦世のなかで』藤原書店、2005。など、多数の本もまとめられました。ベトナムをはじめ、コソボ、アフガニスタン、カンボジアなど各地を取材されて発表されて来られました。

また、NHKの視点論点やラジオ等の番組にも登場され、2006年には第57回NHK放送文化賞を受賞されました。私たちは大石さんがまだあまり知られてない頃(?)に講演会を開いて皆に紹介し、それからずんずん有名になられたね、とわがことのように喜びあいました。それからも昨年は紫綬褒章を受賞され、さらにエイボン女性大賞にも輝かれました。

エイボン女性大賞は昨年で1979年の創設以来、29回続いている賞で、これからの時代を的確にとらえ、社会のために有意義な活動をし時代を生きる女性に夢と希望を与え、功績をあげている女性を表彰してこられたものです。最初の大賞受賞者は市川房枝さん、次は石原一子さん、そのつぎには猿橋勝子さん、加藤シズエさん、宮城まり子さん、高野悦子さん、丸木俊さん、米沢冨美子さん、田辺聖子さんなど多方面の匆々たる女性が受賞されておられます。先日のベアテ・シロタ・ゴードンさんもそのおひとりです。大石さんの受賞理由は、『戦時下の国々を戦後も継続して訪れ、政治的に無力な子どもや女性、家族の姿を「写真」という言語をこえた手段で記録。夢や未来を奪い環境を破壊する戦争を告発し、力強く生き抜く人々の"今"を伝え続ける』でした。

大石さんはそこで現場だけからしか見えない真実を撮りたい、真実の"伝え人"として、支配的な立場にいるひとの"欲"によって起こる戦争の、被害を受ける人々、社会で最も弱い立場にいる女性や病人や家族、とりわけ子供達の姿を、伝えたいとおっしゃっています。

なお、大石さんは、亡くなる前の鶴見和子さんとの対談を『魂との出合い』写真集と対話として藤原書店から出版されました。とてもとても素敵な本で、大石さんのひととなりも写真のとりかた迄わかります。

2008.1.17

新人紹介

尼木　純子

この度、内藤恵子先生のご紹介で新入会させていただきました尼木純子です。

5年前くらい以前に川村くに先生からも入会を勧められていて、当時も入会したいとは思っておりましたが、そのころは、重症患者様の入院を受け持つ救急病院に内科医として勤めており、時間の余裕が無く、断念しておりました。

2006年3月より住道クリニックという透析施設の院長になり、入院施設が無いこと外来透析治療という比較的時間が決められた仕事になり時間的精神的余裕も出て参りまして、皆様とご一緒に奉仕活動に勤しむことが出来るようになり、心より嬉しく思っております。

私の趣味はと言いますと以前はピアノを弾くこと囲碁を打つことでしたが、最近はゴルフに熱中しておりまして、大勢のすばらしい仲間と和気藹々と楽しめるゴルフという奥深いスポーツにのめり込んでいます。この度の入会のきっかけもゴルフ旅行を通じての御縁です。

新たにゾンタクラブに入会し様々な分野で活躍なさっているすばらしい方々におめもじ出来、皆様の熱い心に触れ自分を高めていけたらよいなぁと思っております。

これからもどうぞ宜しくお願い申し上げます。

笹岡　厚子

昨年の7月からメンバーに加えていただきました笹岡厚子と申します。

最近名古屋で生まれ育った若い女性を名古屋城になぞって名古屋嬢と呼ぶそうですが正真正銘の元名古屋嬢です。高校まで名古屋で過ごし、大学から大阪に来ました。今では忘れ去られてしまった学園紛争の嵐の中で大学入試に向かう新幹線の中で京都で降りようかどうしようか迷った挙句、ひょんなことから縁もゆかりもない大阪に来てしまいもう四半世紀以上もず一っと大阪住まいです。もともと建築家になるのが夢でしたのに医学部なんかに入ってしまい教養部の間は何時やめようかとばっかり考えていました。現在のように女性の地位が高くて選択の幅が広かったらさっさと辞めて初志を貫いていたと思います。病院勤務が長かったのですが10年前に北摂の千里で開業いたしました。趣味としては病院に勤務していた頃は周りからロニスと言われるほど批評家いっぱいのテニスクラブでわいわいと楽しく遊んでいたのですが、開業してからはゴルフを再開しました。大学を卒業してすぐにゴルフを始めたのですがさっぱり上達しないまま年数回お遊びでしていたのですが、ゴルフを通じて先輩の丸山先生、内藤先生と知り合うことができこの会にも入れていただきました。素晴らしい皆様にお目にかかれて、やっぱりゴルフを続けていてよかったと思いました。ゾンタのことはまだわからないことばかりですが皆様に教えて頂きながら歩みたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

堀　知子

この度、ゾンタⅡのメンバーに加えていただきました堀知子です。三重県松阪市出身です。徳島大学を経て堺市に来て32年になります。現在南海本線堺駅の駅前で、眼科を開業しています。

大阪に来て約10年間は勤務医と3人の子供の出産育児に追われ、あっという間に過ぎてしまいました。次の10年間は現在の眼科医院の開業と子供達を放任しすぎたために入学試験ではバタバタしてこれもまたあっという間でした。次の10年間はやっと自分のための時間に余裕ができ、医師会の仕事を引き受けたり眼科の勉強会に積極的に参加したりできるようになりました。そして老後の運動に備えてゴルフを始め、最近面白くなってきています。そのおかげで、同期の笹岡先生にいろいろ教えていただいたり、ゴルフ旅行に行ったりして楽しみが増えました。

また一緒に入会された尼木先生は、ゴルフが非常に上手ですので時々ご一緒させていただき、勉強になります。

今まではとかく医者の世界の中ばかりでしたが、ゾンタに加えていただきいろいろな世界の方々と交流でき、すばらしい皆様とご一緒させていただけて感謝しております。ゾンタの信条は、自己の向上に努め、奉仕の分野を広げ、平和を推進するために努力する等とのことですが、次の10年は、その信条に少しでも沿えるようになりたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。